特色あるｅラーニング実施の事例紹介

授業と学習の有機的サイクルを構成する授業支援型 e-learning システム CEAS

関 西 大 学

関西大学では、対面授業と予習・復習を統合的に支援する授業支援型 e-Learning システム CEAS を２００３年から利用し、ICT を活用した教育の情報化を進めている。CEAS は、授業の進行との関連が分かりやすい画面設計になっているため、教員にとって使いやすく利用が全学規模に拡がった。CEAS は、教員個人から組織のレベルまで、教育の質の向上を目指す取組みの中で重要なツールの一つとなっている。

１．実施規模

１１学部１３大学院研究科の全学部・大学院で実施している。

※学部名　：法学部、文学部、経済学部、商学部、社会学部、政策創造学部、外国語学部、総合情報学部、システム理工学部、環境都市工学部、化学生命工学部、大学院

※科目数　：全科目登録、約１万２千科目（内、利用科目数 760）

※受講生数：全学生登録、約２万９千名（内、利用学生数 17,770 名）

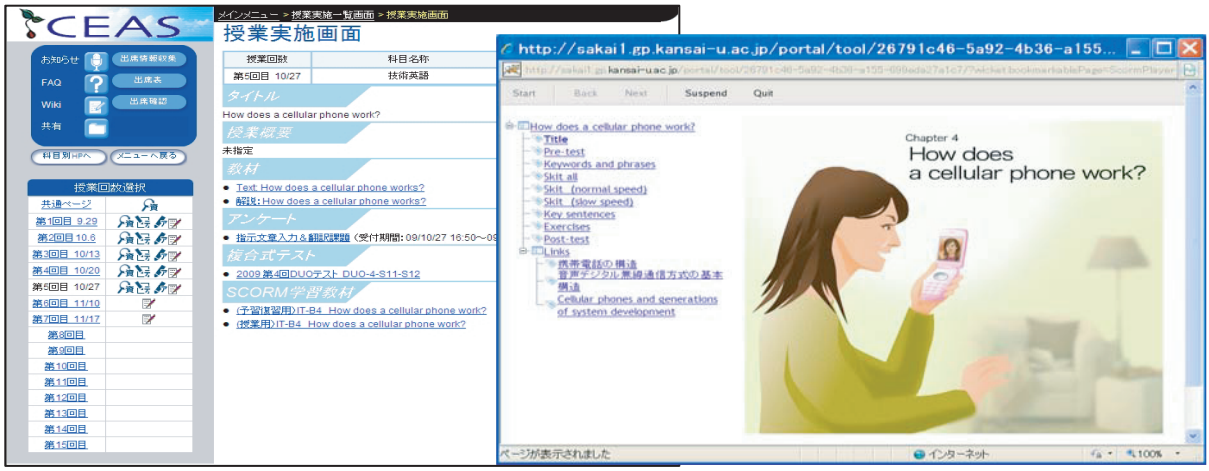
上記正課科目以外に、入学前教育や教育 GP 取組でも利用されている。

２．授業での活用状況（代表的授業での活用例）

授業時間中と時間外での学習活動も含め、CEAS を利用した授業実施形態は、科目内容や担任者の授業観を反映して多様である。

基本的な利用方法は、授業の進行に合わせて授業資料と予習・復習課題を掲載し、授業で活用する。『プログラミング技法』の講義では、授業資料の事前掲載と授業後の予習・復習課題をアンケート形式で掲載している。次週の授業開始時に CEAS 上に提出された予習・復習課題の解答結果を引用し解説を行い、その週の講義に入る。２回に１回は「復習 ESP 課題」と呼ぶ専門英語の課題も課している。

（授業資料、復習予習課題および解答例と解説が掲載された授業実施画面の一部）



（第５回目の授業に配置された SCORM 形式の先端科学技術 ESP 教材の開始画面）

（学生の学習状況の一覧）

（学習コースウェアの学習推奨）

パソコン教室で行っている『技術英語』の授業では、予習・復習に加え授業時間中に小テストを一斉に実施し、テスト結果は自己採点する方式をとっている。この授業では大阪大学現代 GP の取組成果である先端科学技術分野の専門英語（ESP）教材を関西大学にて SCORM 化したものを利用している。学習記録が残るので、例えば「学習データ連結一覧評価表」を参照することにより、予習と授業中の学生の学習状況を一覧でき、評価や指導が容易である。また、科目に関連して自己学習を推奨する学習コースウェアも指定でき、履修学生の学習状況も把握できる仕組みとなっている。

3．大学の支援体制、支援内容

教育開発支援センターおよび IT センターが、CEAS の運用と利用支援を行っている。教員の要望には、「履修環境管理者」の役割を設け対応している。ICT を活用した教育の実践的な研究や経験の交流、システム改善要望の検討などは、教員と職員から構成された教育開発支援センターICT 活用プロジェクトで行っている。

4．e ラーニングの活用効果

① 予習・復習課題を対面授業に組み込むことにより、授業の導入がスムースになり、学生には継続的な学習習慣が身につく。
② 予習復習を評価に組み込むことにより、学習への「強制力」が働き、学力向上につながる。
③ 授業に必要な教材が再利用でき、改善につながる。
④ アンケートの実施が容易であり、学生の理解度の把握が容易であるので、授業改善につながる。
⑤ 授業の実施記録が蓄積され、外部評価の有効な資料となる。

5．今後の課題

ICT を活用することにより、教育の質の向上が望める。個々の教員の利用経験の交流を促進することが個人レベルの課題である。今後の重要課題は、e ラーニングの仕組みを組み合わせた、基礎学力向上への学科・学部レベルでの組織的取組の推進である。